

煎茶席の意匠と思想、煎茶席の言葉の再検討

令和 6 年度 日本建築学会近畿支部民家部会研究発表会の報告

9. 建築歴史・意匠 -1. 日本建築史
煎茶、亭、数寄屋、茶室

正会員
正会員

○坂井 禎介^{*1}
櫃本 聡子^{*3}

正会員
正会員

矢ヶ崎 善太郎^{*2}
桐浴 邦夫^{*4}

1. 開催概要

本論文は、令和 6 年度 日本建築学会近畿支部民家部会研究発表会「煎茶席の意匠と思想」の要約である。開催概要は以下。

日時：2025 年 1 月 25 日（土） 13:00 ～ 17:00

開催方法：対面とオンライン（Zoom）のハイブリッド開催

対面会場：奈良カレッジ交流テラス

趣旨説明：坂井禎介（奈良女子大学）

発表 1：矢ヶ崎善太郎「煎茶席の思想」

発表 2：櫃本聡子「煎茶席の意匠」

講評：桐浴邦夫

現地への来場者 20 人、ZOOM での視聴者 32 人であった。以下に内容を要約する。

2. 趣旨説明（坂井禎介）

坂井禎介から、趣旨説明があった。煎茶席とは、以下の特徴などで定義される。（麓和善『「煎茶会図録」および建築遺構による煎茶席の意匠的特質と設計手法に関する研究』（科研費報告書、2004.3））

①眺望のよい優れた景観と一体となった開放的な空間構成

②窓・建具・高欄などへの中国的意匠の導入

③竹材・唐木・奇木および唐物・渡来物を多用した、明るく華やかな室内意匠

その代表例とされる黄葉亭（図 1・図 2）や山紫水明処の事例を紹介し、抹茶席と比べて煎茶席は建物の中に居ながらにして外の景色が見える開放的な空間であることを指摘した。民家においても、草野家（図 3）のような煎茶席と考えられる建築があることを紹介した。その上で、以下の疑問を提示した。

・疑問 1 煎茶文化はいつから始まったのか

1211 年に「茶を煎じてのめば、人を眠らせないようにする」（栄西『喫茶養生記』）と、鎌倉時代に茶を煎じて飲む文化があることがわかる。室町時代には、中国



図 1 1813 年建立の黄葉亭。煎茶席の代表例の一つとされるが、酒宴を開いた記録しかなく、煎茶を飲んだ記録が見当たらない。（坂井禎介撮影）



図 2 黄葉亭を描いた図。人が集まる開放的なあずまやのイメージだとわかる。（関谷学校蔵、黄葉亭の図。重要文化財関谷学校関係資料の一部。黄葉亭の図。浦上春琴の原図を不明な作者が幕末から明治に写した）



図 3 大分県の草野家住宅の隠居部。煎茶席とされ、当家用の煎茶道具が並べられ展示される。

Reexamination of the Design and Philosophy of the Sencha Tea Ceremony and the Language of the Sencha Tea Ceremony, Report on the 2024 Research and Presentation Meeting of the Minka Division of the Architectural Institute of Japan, Kinki Branch

Teisuke SAKAI^{*1}
Zentarō YAGASAKI^{*2}
Satoko HITSUMOTO^{*3}
Kunio KIRISAKO^{*4}

で文人煎茶が流行した。ということは室町時代から江戸初期に日本にも文人煎茶があって良いと思われるが、日本では、江戸中期の売茶翁が煎茶を広めた、とされる。森蘊は、17世紀初頭の桂離宮の松琴亭を「煎茶の三店的である」とする（森蘊『新版桂離宮（創元選書）』1956）。その根拠は、桂別業記の「夜雨松琴亭前二有…煎茶温酒興」という文で、煎茶と酒が飲まれた。

・疑問2 煎茶席という言葉でいいのか？

煎茶文化の牽引者とされる頼山陽は、自身の招かれた建築において、煎茶以外の行為を多数記録する。酒、歓談、雨の音を聞く、などであり、その一つとして煎茶を飲む行為が記述される。また、煎茶は、「陶器の椀があれば十分で、…跪いて飲むもよし、座って飲むもよし、寄りかかって飲むもよし、寝転んで飲むもよし」（桐陰茶寮記）と、煎茶は自由であることが重要だと述べる。このことから考えると煎茶席のような特定の形式が煎茶を飲むとは思えない。ところで、以上のような用途は、韓国や中国における亭の使用方法和類似することも指摘した。

以上のような文人煎茶の文化は、18世紀後半に流行するが、明治末期までは煎茶が美術品鑑賞の場となり、文人煎茶にあった遊びの精神が消失した。現存遺構や現存資料の多くは、この文人煎茶が衰退した明治以降のものである（漆原拓也『文人煎茶の盛衰』（2015.9、法政大学学位論文））。

煎茶席でなく、「中国趣味の開放的な亭（読みは、てい、ちん、あばらや）」という系譜で捉えると、奈良時代には庭園の池亭（東院庭園など）や山水図（正倉院蔵）に描かれる亭、平安時代には釣殿、室町時代禅宗寺院や山荘の亭や書斎画の亭、江戸初期の大名庭園や貴族庭園の亭（17C 初の高台寺傘亭・時雨亭、桂離宮の賞花亭、仁和寺遼廓亭）、江戸後期のいわゆる煎茶席（1811年の頼山陽自邸の山紫水明処、1813年の黄葉亭）、明治期近代数寄者の亭（大正の益田孝掃雲台の亭）、という流れを描くことができる。煎茶席と呼ばれる建築は末尾に亭という字があることが多いが、古代から近代までの上記の亭の流れの中で考えると、江戸中期以降の建築だけを煎茶席と呼ぶことに疑義がある。

3. 発表1：矢ヶ崎善太郎「煎茶席の思想」

（煎茶に限らず、古代から茶を伴う寄り合いの場がどのようにつくられ、その中で煎茶の場がどのように位置づけられるのかという発表であった。）

まず、茶室という言葉の定義について。この言葉が普及するのは近世後期以降である。それまでは、茶の湯座敷、数寄座敷、数寄屋、小座敷と呼ばれ、座敷の一部を仕切って茶の湯に用いる場合は「囲い」と

呼ばれた。

その上で、茶室とは、「茶を伴う寄り合い（茶会）のため室」と、やや広く定義し、草庵風茶室はその特殊形態。の背景として、茶室の成立は茶屋、茶寮、書斎の系譜上にある。風が吹き抜ける開放的な座敷を「茶屋座敷」と呼ぶ例もある（『茶譜』16C 後）がある。

・書斎の歴史

書斎については、菅原道真の書斎記（平安初期）にはじまり、慶滋保胤の「池亭記」（1002年などから多くの事例が明らかになり、それらに四畳半の広さに匹敵する方丈へに志向と市中における隠遁思想が込められることを指摘した。それ以降も、室町時代の将軍邸の会所、室町時代に流行した禅僧の書斎を描いた書斎図、大阪城天守閣の茶亭学問所屏風（慶長3年）、松花堂昭乗の草庵の「松花堂」などを書斎の系譜の中で位置付けた。その書斎の流れの先に義政の東求堂があり、武野紹鷗（1502-1555）による、四畳半の書斎を改造して行われた茶の湯があると位置付けた。

その視点で見ると、中国の文人の趣味生活の場は、「茶寮一斗の室を側む、書斎の相傍なり」（高濂『遵生八牋』1591）と記述されるように、書斎の性格を持つものであり、そこには茶の存在があったであろう。

・煎茶の精神

煎茶は、茶を煮る場所があればどこでも飲むことができるため、統一した決まりはないこと、重要なのは「煎茶」の自然観に叶う場を選ぶことである。文人が理想とする環境は「仙境」である。文雅、王朝の趣、道教、清風を基盤とする、精神があり、水が綺麗であることを重視した。

4. 発表2：櫃本聡子「煎茶席の意匠」

（櫃本先生から、煎茶席の意匠と題して、煎茶会図録に出てくる煎茶席のしつらえを中心にした発表があった。）

水辺の近く（大阪の淀川、京都の鴨川、東京の隅田川）の寺や個人邸を会場として大規模な煎茶会を行った。その中では、煎茶を中心に、前席から独立していった盆栽陳列席、書画展観席の他、奏楽席、酒席、書画を描く揮毫席があった。

図録に描かれている室内の様子から、座敷飾りや開口部にみられる意匠について事例紹介があり、その中でしつらえは、室内を中国風に演出する重要な要素であることに触れた。帳とともに重要な装置として、机や敷物の使われ方には変遷がみられ、江戸後期には机を多用するが、明治後期以降は一畳大の敷物をL字型に並べ、次第に定型化するなどの変化があった。

青湾茶会図録（文久3年・1863）などの煎茶会図録に類似する民家のしつらえもいくつか見出された。小栗

家の煎茶席(図4)における腰高の壁を残した開口部や壁床、草野家新座敷の三角形平面の床脇の形態が煎茶会図録(図5)と共通した。



図4 小栗家住宅の煎茶室(坂井禎介撮影)

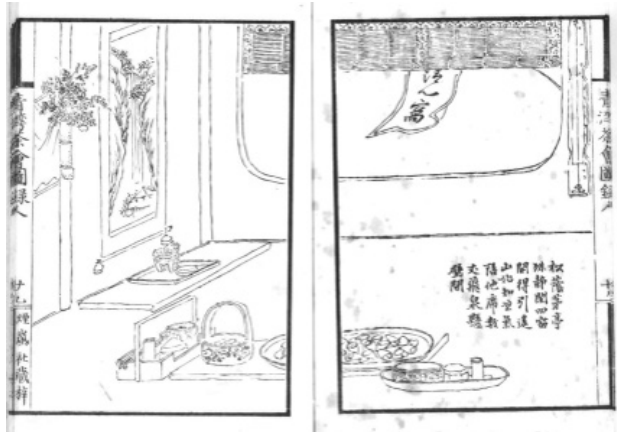


図5 小栗家の煎茶席と共通する意匠の図録 1863年『青湾茶會圖録』(名古屋大学附属図書館所蔵) 出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100436678>

5. 講評: 桐浴邦夫

桐浴先生から以上に対する講評があった。

これまで、主に抹茶の茶室が茶室として、研究が行われてきたが、近年の研究で、煎茶のための空間が解明されることは非常に重要である。しかし、この名称自体にさまざまな問題点があることを指摘した。煎茶がおこなわれてきた室は、単に「座敷」あるいは「数寄屋」などと呼ばれてきた。一方で、抹茶の茶室には炉が切られており建築的特徴が明快であるが、煎茶の茶室はいまいである。いわゆる中国趣味や文人趣味と呼ばれるものは抹茶の茶室でも存在するし、近年、「煎茶室」と呼ばれるものに、抹茶をおこなっていた家も多数存在する。際たる例として、『古事類苑』(居處部洋巻第1巻 p.533)の『『京兆府尹記事十九』伏見一件の弁』がある。「爰に伏見奉行小堀和泉守といふ人あり、府中にさゞい堂といふを建らるゝ、三階作りにして…敷瓦にして都て朱を以塗、金物皆金減金成、其左りの方は南表にして、宇治川筋より小倉の大池を見渡し、敷瓦にして都て朱を

以塗、金物皆金減金成、其左りの方は南表にして、宇治川筋より小倉の大池を見渡し、…紫檀の壇、黒檀の手すり、白銀の金物擬宝珠等、柱は皆白檀なり、床柱は伽羅にして、…金閣銀閣はものゝ数にあらず、…其佳景筆に書にも及ぶまじ、尚唐木造りの建物にして、障子は皆硝子を以て張、」

つまり、小堀政方(遠州流7世家元)が、眺望がよく、唐木を使った建築を作ったということである(煎茶席の定義が、眺望がよく、唐木の使用)。

抹茶の茶の湯に使われた建築の内、開放的で建物内部から周囲の景観を見ていたと考えられる実例としては、西芳寺湘南亭、小堀遠州の擁翠亭や閑雲軒(空中茶室)、慈光院などがある。

・煎茶席と判断されたが、実際は茶の湯が行われた例

煎茶席の意匠があるとされる松殿山莊楽只庵(図6)。旧天王寺屋五兵衛邸を移築、大坂の近世の町家、適塾教室(旧天王寺屋忠兵衛邸)に似ている)は、この所有者の高谷宗範が遠州流を学んでいた(のちに山莊流を創設)ため茶の湯のための建築である。煎茶を行っていたのではない。煎茶席は重要な研究だと思うが、誤解を招く表現なので、より良い表現が必要だと考える。文人趣味、あるいは横山正先生が名付けた、「文雅の数寄屋」(横山正: 琵琶湖を望む文雅の数寄屋、コンフォルト100号2008/01)という言葉も良い言葉である。



図6 松殿山莊楽只庵 抹茶の茶室としてつくられたものだが、煎茶の会が一度開かれた

6. 討論

講評を受けての各発表者からのコメントを述べた後、以下の討論があった。

「江戸後期から明治期に煎茶が抹茶の勢力を凌いだという発言は正しいのか。また天保の家作制限後も勢力があったのか。維新後、一般には伝統文化が廃れたといわれるが煎茶はそうではなかったのか。」(桐浴)

「江戸後期に茶の湯が道具遊びになってきた時代に、茶

の湯よりも自由かつ精神的な煎茶の文化が流行した。しかし、明治期に今度は茶の湯より煎茶の方が道具遊びだと批判されるようになる。その後、戦争によるナショナリズムの高揚の中で、中国的な煎茶を否定し、煎茶道具を捨て、戦後を迎えたため、煎茶の文化が影をひそめてしまった。」(矢ヶ崎)

「売茶翁高遊外によって、当時の権力者、幕政への批判の意図を含む形で、抹茶への批判という意味を煎茶が持つようになった。そうした精神的な部分が同時代の文人、その後の幕末の志士たちに広がり、明治維新という転換点でそれらの人々が国政の中心になったことで煎茶が表舞台に一気に引き上げられた。」(櫃本)

「煎茶文化の牽引者である頼山陽が日本外史を出版し、幕末の志士たちがたくさん読まれ、その幕末の志士たちが伊藤博文や山縣有朋など明治政府の中核となる。そのようにして、煎茶の文化が明治に大きく花開いた」(坂井)

・煎茶会図録という言葉の再検討

「まず意識しないといけないのは、茶専用建築は日本にしかない、特殊な存在だということだ。建築は普通はいろんな用途に使う。しかし、日本に茶専用建築があるために、桂離宮の松琴亭などの亭を茶室と呼ぶことがある。松琴亭は、実際は詩を読み酒を飲み庭を眺めるのが主の使い方で、茶も飲むがそれがメインではない。庭の休憩所であるあづまやである。私は、その誤解を「茶の呪縛」と呼ぶ。煎茶席についても、その茶の呪縛に囚われているのではないかと。櫃本先生の発表にあったように、いわゆる煎茶席では酒、盆栽、書画などさまざまな用途で使用されている。煎茶席という言葉でも良いかもしれないと考えたのは、煎茶会図録という言葉があるからである。しかし、その題名に「煎茶」という名前が記されたものがない。そもそも煎茶会図録という名前で良いのか。」(坂井)

「煎茶会図録のバイブル的に扱われている青灣茶會圖録は、煎茶会図録と言うべきだと考えている。売茶翁の没後100年記念という趣旨であり、その中に出てくる道具は煎茶道具が並んでいる。書画の席であっても、絵を見ながら煎茶を飲み、その書画について語り合おうという意図であった。」(櫃本)

「「茗筵」「茗醺」(どちらも「めいえん」と読む)という名前が題名にある図録は数本存在する。この「茗」は茶を示している。」(矢ヶ崎)

・煎茶席という言葉の再検討

「煎茶席という言葉で良いかについて議論していきたいが、そこで気になったのが、私が今研究している亭という存在である。先ほど名前が挙がった、擁翠亭、湘南亭、時雨亭、など、亭という末尾がつく建物はいずれも開放的で、これらを茶室の範疇に入れていいのか疑問である。庭園の中の休憩小屋である東屋(亭)と捉え、その中に炬が切られていると捉えるべきではないか。煎茶席とされる黄葉亭も、開放的な亭の範疇で捉えることができる。茶室は安土桃山時代以降の文化とされるが、先ほど述べたように、亭という範疇で捉えれば、古代から近代まで連綿と続く亭の文化の中の一つとして位置付けることができるのではないかと。それを踏まえて、煎茶席という言葉で良いのか、各先生方にご意見を伺いたい」(坂井)

「解放されていれば煎茶席、閉鎖されていれば抹茶席だというのはおかしい。ナンセンスである。誤解を生むと思う。煎茶の席で抹茶を飲む場合もあるし、茶の湯の茶室で煎茶を飲むことだってある。酒も飲む。煎茶のための席が文人風であるという言い方は許されるだろうと思う」(矢ヶ崎)

「煎茶という言葉が様々な要素を内包しているともでき、煎茶という言葉を用いることを否定も出来ないと思う。煎茶会のために作った仮設の場合は煎茶席とよんでいいと思う。しかし、常設の建築で、煎茶だけでなくお酒や書画を楽しんだ場合に、煎茶席と呼ぶのは誤解を生むのであれば考えていく必要があると感じた。」(櫃本)

「文人趣味とか中国趣味が入るから、あるいは開放的だからという理由で煎茶席と名づける傾向があるが、どの程度煎茶が行われたか不明なものも多く、この言葉が安易に使用されることは慎む必要がある。しかし、煎茶研究が滞るのはいけない。」(桐浴)

「煎茶席の研究は煎茶研究を否定しているのではなく、煎茶席とは何かということを問い直すことで、煎茶の本質がわかってくると思い、質問させていただいた。そういう視点で見ると、坂井が示した亭という観点や矢ヶ崎先生が示した書斎という観点で古代からの書斎の系譜の中に所謂煎茶席を位置付けることができるし、煎茶は煎茶だけでなく酒や書画などさまざまな行為が行われる自由なものであったこともわかる。茶室は安土桃山以降のものが茶室研究の対象だが、もっと大きな研究に広げることができると思った。」(坂井)

*1 奈良女子大学 専任講師・博士(工学) Ph.D. (Engineering), Lecturer, Nara Women's University

*2 大阪電気通信大学 教授・博士(学術) Ph.D. (Science), Professor, Osaka Electro-Communication University

*3 博物館明治村 建築担当主任・博士(工学) Ph.D. (Engineering), Restoration Engineer, Museum Meiji-Mura

*4 京都建築専門大学 副校長・博士(工学) Ph.D. (Engineering), Vice Principal, Kyoto Architectural College